

要旨

本稿は、ライフサイエンスにおけるエコシステムがどのように相互補完的に機能し、変遷してきたか、そして日本における課題は何かをベルギーの事例などを参照しつつ、検証していくものである。本稿で明らかにし、主張する点は次の3点である。

(1) ビジネスとしてのライフサイエンスは、(北米を中心に)グローバル大手がその規模を拡大するなか、ベンチャーキャピタル投資が増大し、この枠組みが固まる過程で、アカデミアでの投資なども堅調に増加し、開発プロセスでの資金や協業が手厚くなる、という循環が見られている。

(2) このシステムはグローバルに成り立っており、そのグローバルな枠組みへのコネクトという側面では、ベルギーはサイエンス、人への投資をベースに、独自の展開を行い、成果を上げた国の一つであり、その根幹にはサイエンスの強化があり、人への投資が通底してきた。

(3) 日本では、大手製薬業等の展開はグローバル化のなかで一定の伸長を見せているが、ファイナンスやアカデミアの伸長・成熟はこの伸長とは並走しきれていない。しかし、グローバルな構造へのアクセスを見据え、1) アカデミアへの資金供給方法をサイエンティストのキャリアパスに沿った形で改善し、2) VC や起業家などに関する人材育成を柔軟に実施すること、つまり人への投資を重視することで、シーズ供給の不足というボトルネックを取り除くことにより相互補完的なエコシステム実現の余地は存在している。

Keywords: ライフサイエンス、エコシステム、相互補完、人的資本、ベルギー